

隣国との関係が生命線

国際文化財団
理事長 久保木修己

女性国家日本はまず、隣国（韓国・中国）との関係を最重要視すべきであると述べてきました。これまでの日米関係は、冷戦構造の中に日本が期せずして、組み込まれた結果、成り立ったものでした。日本自体の努力なしに、アメリカの保護のもとで繁栄を謳歌できたのです。これからはそうはいきません。

日米貿易摩擦に見られるように、アメリカはこれからも対日本、あるいは対韓国に圧力をかけて、時には理不尽な要求を無理押ししてくる可能性があります。私はもう十年以上も前から、日本だけで欧米と交渉してはならないと言ってきました。いくら正しいことを言っても、日本だけが突出して孤立化するのが目に見えています。現にそうなっています。

日本はその時、韓国や中国あるいは台湾と共同して、欧米との交渉にあたる必要があります。日本は今日、東アジアの国々、とりわけ近隣国である中国・韓国、その中でも特に隣国韓国と深い信頼関係を構築する必要があります。

真の意味で世界に尊敬される国家になるために、隣国を大切にして、隣国からまず尊敬を受ける国になる必要があります。そのためには、まず最低限日本がやらなければならないことは、過去を清算する姿勢を持つこと。それがなければ、この両国の未来はありえないということです。

そして、韓国が必要としていることで、日本ができることは極力行うこと。例えば、韓半島の統一問題があります。これは、早ければ今世紀中にも実現される可能性があります。しかし、ドイツで起こったような形は、できるだけ避けたいというのは、韓国の希望であり、日本も中国も同じです。ドイツ型の統一は経済的なリスクが大きすぎます。それで、韓国としてはできるだけ統一を先延ばししようというのが本音のようです。

しかし、こればかりはいつ起こるか分かりません。何せ、北朝鮮は、既に経済的には崩壊しています。情報統制が行き届いているために辛くも国家が保たれているに過ぎません。日本は、北朝鮮の開放を極力助けて、できるだけ混乱のない形での統一に援助を惜しむべきではありません。それは、長い目で見れば、日本のためでもあります。この地域で混乱や紛争が起これば、日本に混乱が飛び火してくることは明らかです。

韓半島統一は、日韓の信頼関係を構築する絶好の機会です。日本の経済力がこの地域の安定のために貢献することになるのです。私たちは、日韓の信頼関係を構築するのは、政治家や官僚たちの努力だけでは不可能だろうと考えています。韓国人の反日感情は国民一人ひとりの心の中にしっかり根を下ろしています。それを一つ一つ丹念に解消する努力をしなければ、政治家同士の上っ面の関係に終わります。

そこで、私たちは長年、日韓の国民が姉妹結縁の関係を結ぶことを推進してきました。草の根の親善交流です。日本人が韓国に行き、韓国人が日本に来て、姉妹関係を結ぶ。草の根的な付き合いを進めてみると、相互に厚い友情が芽生えてきます。そういうところから、過去の怨念を少しずつ少しずつ取り除いていく。その努力が必ず

実を結ぶ時が来ると確信しています。

そういう草の根的交流が進めば、日韓トンネルも夢ではなくなります。日韓相互の心の壁を取り除いて、信頼と友情のトンネルが、真のトンネルとなるのです。日韓トンネルとは、その証なのです。

日本は戦後の恩を感じているせいでしょうか、アメリカの顔色をうかがい過ぎます。しかし、そろそろ自らの進路を自らの意思で決める時が来ているようです。かつて、岸先生は六〇年安保の時、日本の国益を考えて、命がけで安保改定に取り組みました。アメリカとの関係が日本の将来の生命線であると考えたからです。この選択は間違いありませんでした。あの時、安保に反対したすべての人々も、それ以後の高度成長の恩恵に浴することができたのです。